

平成10年10月5日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（二五）

第二三則 魯祖面壁

〔示衆〕

衆に示して云く、達磨九年、呼んで壁觀となす。
神光三拝、天機を漏泄す。いかにが蹤を掃い、跡
を滅し去ることを得ん。

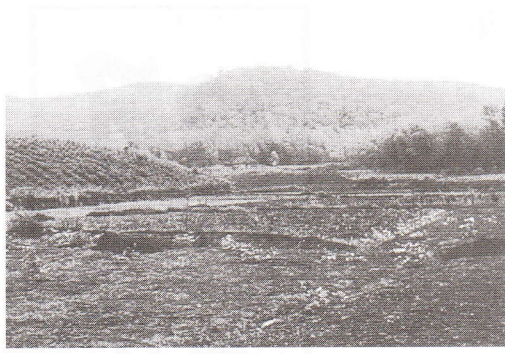
〔本則〕

挙す、魯祖、およそ僧の来るを見るや、たちま
ち面壁す。「相見し了れり。」南泉、聞いて云く、
我れ尋常他に向かい、空劫以前に承当せよ。「考か
れずに自招す。」、仏いまだ出世せざる時に会取せ
よと道うも「和尚は会すや未だしや。」、なお一箇
半箇すら得ず。「ただ詮索を漏るるがためなり。」
他は怎麼ならば、驢年にし去らん。「忙者は会せず。」

今回もまた唐代の魯祖と南泉。ここではともに初登場の人々です。魯祖は魯祖宝雲（生没年不明）のことで馬祖の弟子。安徽省貴池県の魯祖山で道場を開きました。一方の南泉は有名な南泉普願（七四八～八三四）で、やはり馬祖の弟子で同じ貴池県の南泉山に禅道場を開いた禅匠です。つまり、魯祖と南泉は兄弟弟子であって近くに住し、とても仲が良かったようです。それは、この「魯祖面壁」のほかに、『従容録』第九三則には「魯祖不会」というのがあって、魯祖と南泉が仏性について親しく問答したさまを載せていることから知られます。

現在、この貴池県を訪れるためには、南京から銅陵まで鉄道で七時間、銅陵からクルマで一〇〇kmとばし、ようやく県城です。魯祖山も南泉山もここからさらに数一〇キロ山に入りますが、惜しくも伽藍は何も遺されていません。魯祖山はともかく、南泉山では普願のもとで、趙州從諗・長沙景岑・洞山良价などの錚々たる禅哲たちが学んだ古刹でありますから、わたくしは一九八六年九月、雨で泥々になつて訪れたこの寺跡に佇み、感無量でありました。とまれ、まず万松さんの「示衆」をみましょう。例によつて意識いたします。





南泉山

「ダルマさんは九年間も面壁の坐禅をしたので、人々は『壁觀のバラモン』と呼んだ。また弟子の慧可は悟りの心境を三拝で示しダルマの髓を得たので、後人はこの得髓をもってまわるようになってしまった。こうしたくさみの跡を、どうしたらとり払えるかな。」

こんなニュアンスです。つまり偉大な先人たちの絶対的な仏法の中味もわからず、後人がただ公案としてもてあそぶことへの批判なのです。そこで、万松さんをこう云わせた「本則」をみましよう。これも意識です。

「魯祖は参学の僧が来ると、いつもクルツと面壁坐禅、ちつとも

相手にしなかったそう。これを聞いた南泉は、『ワシはいつも学人に對して、本来の面目をさとれ、仏がまだ世に現れぬ以前をさとれ、とハッパをかけているが、わかったヤツは微々たるものヨ。それなのに、魯祖クンはあんなふうでは誰ひとり感化などできんワイ。』といったそうじゃ。」

どうでしょう。文中の「空劫以前」とは、すべての現象が起こる以前の絶対的な存在。本来の面目と同じです。「驢年にして去る」は絶対にありえぬこと。ですからこの「本則」は、表面的には魯祖が学人に對して言葉で教えず、もっぱら面壁したのに對し、南泉が批判したという故事です。この故事がのちに公案として参究されるポイント、魯祖の面壁坐禅の内容や質なのですね。学人指導の方法が問題ではないのです。

面白いことに、曹洞宗の先人たちの解釈をみると、魯祖の坐禅そのまが本来の面目に徹した行であるから、学人を感化させるすがたである、学人をしておのれの魯祖に目ざめさせる実践である。だから南泉は魯祖の宗教家としての活動のニブさを指摘することにより、かえって面壁の感化力の偉大さを賞めているのだ、とみていま

す。これに對して臨済宗の先人たちの解釈は、魯祖の閉鎖的な自己完結のあり方を南泉がヤユしたのだ、とみるむきが多いようです。

これは、はからずも曹洞・臨済の両宗の宗風的な特質のちがいを示すものですね。曹洞宗は黙坐を重んじ、臨済宗は公案参究による見性（さと）を重んじるという宗風の。万松さんは曹洞宗の人ですから、もちろん前者です。

つまり、さきの「示衆」でダルマの面壁は悟りに徹した自在のほたらきを示す仏行として、魯祖の面壁と質的に同一視していることから、それは明らかです。また、「本則」のはじめにコメントして「すでに学人と相見した」というのも、魯祖の面壁をいかに高く評価しているかを示しています。

なおありがたいことに、道元禪師がこの「魯祖面壁」の風光に對して、詩を一首よんでいますので紹介しましょう。

吾が師、独歩す転身の路、
しばしば僧の来るを見、異同を絶す。

たとい、君がために半を談ぜんとすとも、
かえって、面壁をして、^か他の功を失せしむ。（永平広録九）
「転身の路」は転身自在の活路

のこと。ですから、いたずらに一箇半箇のために語ったならば、かえって面壁というすばらしい功德が失われてしまう、というように、禪師もまた魯祖の面壁を讃えています。それは仏祖としての転身の路であるからだ、とみているところに注意しなければなりません。

わたくしたちは、ダルマや魯祖は——とむかしのエライ——お祖師さま、という觀念がさきにとってしまっています。ところが道元禪師は、いま、ここに正しく仏祖伝来の只管打坐を行ずるならば、その身そのままで釈尊やダルマさんの坐禅と同じなのだ、と示されているのです。かの『修証義』にも採られている「われらが行持によりて諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり」（行持卷上）というお言葉は、まさにそのあたりの消息をのべられているのであります。何とありがたくもすばらしい教えではありませんか。

わたくしたちが禪に参じるとき、実践よりも知識が先にたつことの方が多いのがふつうです。しかし、古仏たちの言動を知るとともに、それをわが身におきかえてみ、一人称の立場で参究するようにつとめることが、禪を身につける勘どころであります。

第二次訪中特集

第二次訪中の円成を祝す

訪中団団長 椎名 宏雄

この春、当山参禅会員有志の道念と熱意により第二次の龍泉院訪中団が結成され、所期の目的を無事円成したことは大変意義深く、すばらしい慶事と存じます。

今回は、禅の初祖、ダルマ大師の祖蹟である嵩山少林寺参拝を中心に、比較的中国北地への参観でしたが、雨にうたれた若葉や伽藍はかえって美しく、悠久の歴史を刻む各地の景勝は、いつもながら新鮮な印象を与えてくれました。

団員は七組のご家族同伴ということもあって、終始なごやかな雰囲気につつまれ、参拝を絆とする道友の交わりが一層そのふくらみを拡げ、ここにまた追憶の文藻を編むことは、二重の欣慶であります。

ここに、訪中の無魔円成を祝し団員各位のご苦勞を心からねぎらうと共に、特に初中後にわたってご苦勞なされた五十嵐秘書長さん、添乗員としてお世話下さった神宮寺将雄氏、そして現地の全線随行に誠心尽くされた張江南さんには、丹心感謝申しあげます。 合掌

感動の〈第二次〉訪中記

平成八年の第一次に次いで、去る四月二八日から五月四日まで六泊七日の日程にて第二次中国訪問が挙行されました。今回は、高野千代子さんの第二次訪中熱望に多くの会員が賛同、それに椎名老師がお応えくださって実現の運びとなりました。それを具体化してくださったのは、五十嵐さんとヤマトトラベルの神宮寺さんでした。

参加者は、椎名宏雄老師、小畑節朗代表、高野千代子・司さん親子、寺田哲朗さん、三町勲・ムツミさん夫妻、中島南洲男さん、安本小太郎・郁子さん夫妻、五十嵐嗣郎さん、今泉章利・房子さん夫妻、添田昌弘さん、宮本茂さん、井之輪進さん、美川武弘・恒子さん夫妻、松井隆・弘子さん夫妻、杉浦上太郎・知子夫妻の二二名。それでは旅程のご紹介を。

●四月二八日。一〇時四〇分成都空港離陸。一路北京へ。北京は雨。明・清朝の皇帝が五穀豊饒を祈願した天壇公園。書画骨董の街琉璃廠、広大な天安門前広場を見学。

●四月二九日。北京市内の街中に忽然とそびえ立つ萬松老人の塔拝観。一路郊外へ。先ず明王朝一三代に亘る陵墓群の十三陵。次いで

中国最大の名所、万里の長城参観。想像を絶するスケールに圧倒。夕刻中国国内航空にて古都西安へ。

●四月三〇日。西安郊外の驪山の麓にある玄宗皇帝と傾国の美女楊貴妃の静養地である華清池参観。バスの車窓から秦陵を拝観しつつ兵馬俑博物館へ。秦の始皇帝陵の一角に、始皇帝陵を守る近衛軍団の副葬坑から掘り出されたとの由。西安の中心地は長方形の城壁に囲まれた中。歴代の優れた石碑・墓誌・石刻像を集めた西安碑林博物館は、城壁南門のすぐ内側にありました。再び城壁を出て、大雁塔拝観。本塔はインドより經典を持ち帰った玄奘三蔵が翻訳した仏經經典六〇〇部余を収めるために建立した。夜寝台列車で洛陽へ。

●五月一日。早朝洛陽着。ホテルで朝食後すぐ洛陽郊外へ移動。当日はメーデーで中国の人々も行楽地へ向かう様子があちこちで散見。最初の訪問地龍門石窟も大賑わい。更にバスで登封県へ。嵩岳寺塔、法王寺塔、嵩陽書院拝観。ホテルにて椎名老師の特別講義拝聴。その内容は、達磨大師と断臂慧可との問答（景德伝燈錄卷三にて）。達磨大師を初祖とする少林寺で、椎名老師より感銘深いテーマの講義を賜ることの幸せを、しみじみ全員で噛み締めました。

●五月二日。今回訪中の眼目、少林寺訪問。禅発祥の地でもあります。本堂にて椎名老師とともに、全員で般若心經をお唱えしました。歴代僧侶の墓所塔林拝観。ロープウェイで二祖庵訪問。小登山で達磨面壁洞拝観。有志だけの拝観でしたが、最年長の高野千代子さんも共に。その頑張るお姿は全員に大いなる感銘を与えました。

●五月三日。高速道路で開封へ。風光明媚な龍亭公園にあるのが龍亭。宋代の皇帝の輿が觀光の目的で復元。輿乗りに興じる会員数名。幾度かの黄河氾濫にも耐え続け九五〇年の命を今に伝える鉄塔。表面の煉瓦にコゲ茶色の釉薬が使われているためまさに鉄塔の風情。高さ5m、全身金箔の光目映い四面千手千眼觀世音菩薩像が安置されている相国寺拝観。再び鄭州へ。黄河遊覧地区。河幅数キロにおよぶ中州へはフオーバークラフトで。かなりの黄砂を含む黄河の水はまさに黄土色。日本とは全く自然のスケールが違うことをまざまざと実感。その夜はホテルでサヨナラパーティー開催。会員全員の感銘深いスピーチ。椎名老師からは会員に対し暖かい労いのお言葉を頂戴し、また全旅程の間一環して献

身的協力をしてくださった素晴らしい中国ガイドの張さんと、ヤマトトラベルの神宮寺さんに対し、謝辞とともに記念品を贈呈。

●五月四日。中国国内航空にて、鄭州から上海へ移動。上海市内の玉仏寺拝観。二体の釋尊の玉仏で知られる臨済宗の名刹。一六時発の日本航空便で上海空港から一路成田空港へ。全員無事元気で帰国。

第一回の訪中は、道元禪師ゆかりの地と禪宗に関わる五山巡礼でしたが、今回は禪宗初祖、達磨大師を訪ねる旅で誠に意義深い訪中を重ねることができました。かつて達磨大師が面壁した洞を目の前にした時会員諸氏の目が、恰も青年のようにキラキラ輝いていたのが大変印象的でした。このような素晴らしい訪中が実現できたのは、椎名老師の深いご愛情とお力のお陰さまで。感謝しつつ第三次訪中を再度「超熱烈願望」(杉浦記)

仏教伝来を辿る(二)

沼南町 松井 隆

再び中国の旅が実現し、妻と初めての海外旅行が無事叶えられ、大変な感動を与えていただいた椎名御老師はじめ参禅会の皆様方に深くお礼申し上げます。

前回の「中国五山の旅」をきっかけに添田様にお誘いいただき、龍泉院参禅会との縁を得て、禅をはじめとした諸々機会に恵まれることができました。その上「仏教伝来を辿る」としたテーマで中国の旅が回を重ねられるのは、私の人生にとって最大のイベントであり、一層精進しなければならぬと、思いを新たに次第であります。

それでは今回の旅の印象について次の二点を記してみます。

西安の都市

西安(元長安)は、シルクロードの東の玄関口に位置し、西遊記の玄奘三蔵法師がインドから多くの經典を持ち帰ったところによく知られています。また奈良の平城京をはじめとして、整然とした碁盤の目を織りなす京都に代表される日本の都市の骨格はこの長安をモデルにしていることも有名であります。

日本の仏教は朝鮮半島百濟より西暦五百年代半ばに伝来し、聖徳太子らによって布教され、第一次遣唐使派遣が六三〇年のようであり、七一〇年奈良時代から平安時代の都市建設に中国との密接な交流が深められました。その交流の代

表が長安の都市構造であり、また仏教伝来であると思われます。

したがって今回の旅は、この仏教伝来の時代の結節点としての長安を訪ねることに深い意味があるわけでもあります。

実際西安の街を見て驚かされたのは、周囲一二kmに及ぶ城壁であり、高さ二〇m天端巾一二mは遊歩道になり街の全てを見渡すことができます。碁盤のような町造りは、京都や奈良と同じで、寺社仏閣の歴史的建造物が多く点在し、まさしく日本文化のルーツをこの目で確かめたことになりました。

黄河の流れと環境問題

さながら今日の中国は人口や経済政策等により環境問題において苦戦しているようです。今回訪れた登封から鄭州に向かうあたりは、石炭の産出が豊富でかつ野天堀が可能のため、この付近の火力発電所は石炭を燃料としている。そのため、大気汚染が激しいところであるとガイドさんが話していました。

また、黄河上流の黄土高原は世界で最も砂漠化が著しいところとされています。

私は仕事柄黄河を訪れることを相当期待していました。ところが私の想像していた黄河とは相当か

け離れたものでした。ホーバークラフトで中州に向かい、そこに立つて見ると何と川幅は二、三〇〇mと狭く、中州や左岸の河原が十数倍に見え、水量も極端に少なく、私のイメージしていたとうとうと流れる大河の黄河とはほど遠いものでありました。

黄土高原から流れる黄河は全長五四〇〇キロで渤海に注ぎ、流域面積は日本の国土面積の約二倍の七五万平方キロに及び、流域には約一億七千万人が黄河の水に頼って生活し、農工業を営んでいるのです。私達が見たこの少ない流量の原因は、上流部の砂漠化による雨量の減少と広大な耕地に水を潤すための農業用水の使用量が増大した二点が大きな要因のようです。

最近の読売新聞(六月一日・苦悩する大地)によりますと、黄河の断流(流れが極端に少なくなる)は一九七二年頃から発生し、今年は既に一〇回、日数にして一〇〇日ぐらい発生し、水質汚濁と合わせて事態が緊迫しているようであります。私達はこの瀕死の状況にある黄河をこの目で確かめたわけです。この付近では毎年一七センチ川底が土砂の堆積で浅くなり、鉄道橋の架け替えが余儀

なくされた由、なるほど旧橋脚の残跡が見られました。

黄土高原の砂が上昇気流により上空に舞い上がり、偏西風に乗り日本に降砂現象を引き起こしている。また大気汚染や酸性雨等の対策に取り組むことができる中国に早くなつてほしいと願うのは私人だけではないと思います。

以上西安の町のこと及び黄河について記しましたが、六千キロ余に及ぶ万里の長城や兵馬俑坑博物館等を見て中国の歴史の深さやスケールの大きさに驚かされ、また洛陽の龍門石窟の十万体も彫られた仏像群や嵩山の太室山と少室山の山並みを背景に、仏教などの寺院や仏塔の伽藍は目に深く刻みこまれ、いつまでも忘れることができない情景となりました。

二度目の中国の旅にこれ程感激を得られ再度「仏教伝来を辿る」旅の実現を祈るとともに、参禅会の皆様のご健勝をお祈りして終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

二つの大きな思い出

流山市 中嶋 宏誠

仏蹟を巡る旅で、感激、感動したことが沢山ありますが、中でも

忘れられない「二つの大きな思い出」があります。

その一つは、登封県嵩山少林寺で椎名老師の読経に合わせて全員で、般若心経を唱えていた時のことです。お経の途中で息継ぎをすると「頭から肩にかけてジーンとしびれ」を感じました。何だ、どうしたのか、どうなったのか、と思ひ読経を続けました。また、息継ぎをすると同じように「頭から肩にかけてジーンとしびれ」ていました。

読経が終わって、どうして、このようなことがおこったのか考えてみました。たぶん集中した結果、このような現象がおこったのではなからうかと思っております。それにしても、初祖達磨大師様を参拝した時に、このような現象がおきたことは、大変ありがたいことでもあります。

もう一つは、開封の大相国寺で椎名老師様にお見立てをいただいたて、木像の「釈迦像」を求めることができたことです。

現在わが家には、平成二年九月北京でアジア大会が開催された際に、母に買ってきてもらった石彫りの釈迦像があります。木像の釈迦像が欲しくて、前回の五山巡拝の時に探したのですが、求め

ることができませんでした。今回待望の「木像の釈迦像」を椎名老師様のお見立てによって求めることができました。感謝しております。また、釈迦像を求める前に大相国寺で椎名老師様とご一緒に写真を撮ってもらったのも、何かの偶然ではなかったのではと思われます。この写真も大切な旅の記念です。

訪中の後、わが家の一階の出窓には、釈迦像とは別に求めた「布袋弥勒菩薩さま」がどっしり坐つて、東側の道路に向かって、笑みを振りまいており、隣接にある協栄生命老人ホームの方々の心を豊かにしております。道路の向こう側の塀ぞいには、家内と私が手入



中嶋さん丹精のゼラニウム

れをしているゼラニウムの花が約四〇mに渡って、四季を通じて咲いています。一度ご覧下さい。

最後に、椎名老師様をはじめ、「仏蹟の旅」を企画いただいた方、同行していただいた方々に深くお礼申し上げます。 稽首

百聞は一見に如かず

千葉市 寺田 哲朗

わずか七日で秦時代から現代まで、二二〇〇年間に封じられたタイムカプセルを覗き見たのでした。現物を見ないとイメージが湧かない小生にとって、百聞は一見に如かず、とは正にこのことでした。

西安の秦陵と兵馬俑坑。絶大な権力（七〇万人の捕虜囚人とか）によって築かれた皇帝の墓と軍団。タイムカプセルが忽然と開封されたら、また莫大な観光資産としてお金を稼いでいます。始皇帝もそこ迄は予測しなかったでしょう。

北京での明の定陵も同じです。龍門の石仏。実にいい顔をしています。強制作業によつては作り得ないお顔です。信仰の厚い、高い境界の仏師が生き甲斐を以て彫刻したに違いありません。権力者の墓とは対照的で、明るい気分になれます。

少林寺達磨洞。五〇分の登山で達磨面壁の洞窟へ。大健闘高野さんの到着に一同拍手が起こりました。一緒にしんがりをつとめたガイド張さんの人柄を拝見し、こちらにも拍手。

洞窟の外に壊れた鋳物の仏像が三体、達磨像の側にあつたのが無造作に放置してありました。これは痛ましい光景です。

黄河。ホーバークラフトで粘土質の平たい中州まで渡りました。

河水の三・七%が泥との事、煉瓦や塑像の材料は無尽蔵です。四千年の昔、夏の禹王は自ら現場を測量して歩き、治水によって国民を救ったとの話です。最後の氾濫は一九三八年日中戦争での故意との事、これを知らずに質問してしまいました。

文明とは何か？と考えてしまいます。昔にして驚異的に高度な設計の技術の集積、その一方では計り知れない民衆の労働と犠牲において完成しえた建造物。そうすると現代の文明を千年後の人々は、どう評価するのでしょうか。戦争による犠牲を伴って開発された原子力を始めとする技術の産物を。

だが、あまり考え過ぎず、素直に感動して観光するゆとりも必要だと思ひ直します。布袋様―当地

では弥勒菩薩の化身―を見ると、「大肚能容容天下難容之事 慈顏常笑笑世間可笑之人」(相国寺天王殿)とありましたし…。

団長老師様、幹事様、添乗員様、ガイド様、団員皆様に只謝々、であります。 合掌

少林寺諸堂拝観及び達磨面壁洞に立つて

柏市 宮本 茂

北京、西安、洛陽、登封、鄭州、上海と七日間の中国旅行はあつたという間に終わった。大変充実した、内容の濃い一週間であり、また連休でもあつた。

北京ではあいにくの小雨であつたが「天安門広場」に立つた時、よくテレビで見る感じとはかなり違った実感をもった。特に天安門広場の四方は立派な建物がたち並び、メーデーも三日後に控え式典のための赤旗も数本掲げられて迫力を感じた。北京郊外の「万里の長城」(八達嶺)の急な石段を一步一步登りつめていく時は少々へばつたが歴史上欠かせない「万里の長城」を自分の足で登っているんだなあとと思うとワクワクした気持ちになり、また万里の長城から四

方を眺めると、延々とつながる長城に中国歴史の奥深さを痛感した。

「西安」。シルクロードの玄関口であり又城壁が街をとり囲むこの大都市は唐、明の時代まで「長安」と呼ばれた。この由緒ある市の中心地には、明代の鐘樓、南側の城壁のすぐ側に宋代の有名な碑林がある。東郊外には唐代の玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスに繋がる華清宮、南郊外には大雁塔があつたが、

その中でも印象的であつたのが「兵馬俑坑」である。現在発見されている三つの俑坑で約八千体の陶俑陶馬と一万の武器が出土すると推測されているが、その発掘作業及び復元作業のお陰で二千年前の秦軍の雄姿が生き生きと私達の眼前に再現されていた。

西安から洛陽へは夜行列車(一等寢台)で移動したが、メーデーを含めた連休を田舎に帰る大勢の人達で西安の駅は騒然として恐怖感さえ感じられた。この車中泊の事はこの旅行中で印象に残った事柄である。一等寢台といつても昔の日本の三等寢台といったところである。夜中に二回目ざめて車中を少し歩き回ったが隣の二等車輦には休暇で故郷へ向かう人が故郷へ帰るうれしい気持ちを押しえきれないのか大変なにぎわいであつた。

た。中国の経済復興は都心、地方主要都市において建設、高速道路が急ピッチで行われていたが、鉄道の整備の方はそれらに比べるとやや遅いようである。

今回の旅行のハイライトは、なんとといっても少林寺諸堂拝観と達磨面壁の場を訪れた登封県であつた。幸い登封県訪問時には雨もあがり天候まで我々に味方してくれた。嵩陽書院、法王寺、嵩岳寺塔では大変地味な寺院、塔であるが日本人好みのする嵩山連峰を背にその姿を写し出していた。特に中国最古的塔である北魏嵩岳寺塔は本当に写真になる塔であると思われた。その日ホテルの会議室にて椎名御老師より少林寺禅宗二祖慧可断臂についての講義を受けたが翌日訪れる少林寺、達磨面壁洞についての講義はタイミングもよく大変有り難いものであつた。翌日朝食の前に登封市を散策したが観光収益で市の財源が潤っているためか、今回訪問した中で最も街が整備されまた清潔感があり観光客も安心して観光できる街と思われた。聞くところではここ二年でこのような街になったとの事。中国の急ピッチな復興の証はこの登封市でも見られた。

待望の少林寺では連休のため中

全国各地の観光客や日本をはじめ諸外国からの観光客で予定の駐車場まで行くのに時間がかかった。バスの中窓から少林寺学校での学生たちの練習風景をみる事が出来た。少林寺山門では「少林寺」という三文字が山門に掲げられておりその側の壁に「禅宗祖」と書かれていたのが印象的であった。また二祖慧可断臂の立雪亭、大雄宝殿での全員による参拝と読経では初祖達磨大師と二祖慧可と一緒に読経しているような気持ちになった。

そして塔林観光後の徒歩による達磨面壁洞までの山登りには正直いつて何度途中で帰ろうかと思っただことか。しかし皆が一步一步登っていく姿を見てみると、ここで落伍しては後々拝観できなかった事を悔やむと思い、必死になって一步一步石段を登った。その甲斐あって目的の面壁洞を拝観できた時は今迄の疲れが一度にふっ飛んだ。そして、この場所でその昔初祖達磨大師が修行されたかと思うと感無量であった。しばらく遠方の景色を見て充足感に浸っていると高野さんが神宮寺さん、ガイドの張さんと一緒に登ってこられたのには驚いたと同時にスゴイと思った。本当に高野さんの体力と精神力には心より敬服しました。

達磨歓迎

柏市 五十嵐嗣郎

今回の訪中について書きたい事はまだまだ有りますが、かなりの強行軍旅行を無事終えて全員健康で帰国できた事は椎名老師、幹事の小林様、五十嵐様、ヤマト観光の神宮寺様他中国各地のガイドの皆様のお陰と感謝致します。今出来上がった写真を見て今回の七日間の楽しい思い出に浸っています。最後に第三回訪中旅行が企画、実行される事を切望し、その日を楽しみに日々精進に努める所存です。

クリントン米大統領が六月二十五日から九日間にわたり中国を訪問している。世界で最も忙しい人が我々の中国旅行より一日長いのは少々驚かされた。

西安（懐かしいガイドの張さんの住む都市）では、中国政府・産業界あげてクリントン大統領を歓迎している模様がTVに流れていたが、我々一行については、達磨大師以下のお祖師さま方々が熱烈に歓迎してくれたようです。

その理由は次の通りです。前半の北京・西安では天候に恵まれず、地元の人達からも「例年に比べてこの時期としては異常に雨が多い。

やはりエルニーニョでしようか」と同情されました（異常気象は全てエルニーニョのせいにするのは、どうも世界共通らしい）。しかし、洛陽の龍門石窟を訪れる頃から、天気は快方に向かい、嵩山少林寺の達磨洞に登るときは、最高のお天気に巡り合うことができたからです。

達磨洞は、少林寺の背後にそびえる少室山連峰の一つである五乳峰の山頂近くにあり、急な山道を一時間ほど登らなければなりません。実は、雨に煙る北京空港に着いた時から、達磨洞に参拝する日だけは、晴れて欲しいと念じていました。

この願いが通じたのか、少林寺に参拝する日は朝から雲一つ無い晴天に恵まれ、嵩山を取り囲む太室山や少室山をはっきり眺めることができました。

上天気とこの日はメーデーに続く三連休の中日にあたるので、少林寺の参道には物凄い観光客で溢れかえっていました。しかし、少林寺の横手から初祖庵に向かう小径に一步入ると、人影は疎らとなり、ゆったりと二五分ほど歩いて初祖庵に到着します。

ガイドブックによると、初祖庵はふだん閉じているようですが、

その日は室内にカメラマンが入っており、拝観することができました。壁面にライトをあて撮影している横で、私もカメラを向けシャッターを押そうとしたら、係りの人にキッと睨まれて、慌ててカメラを引っ込みました。

初祖庵からは急な山道を三〇分ほど登りつめますが、山男の添田さんや松井さんなどは涼しい顔で登っていきます。しかし、最長年の高野さんにとっては大変な登りの連続です。一步一步ゆつくりと、着実に登っていかれる後ろ姿を見ていると、まるで達磨さんに引き寄せられているように思えました。

高野さんの、なんとしても達磨洞に参拝したいという頑張りど、ご子息の司さんや張さん達のサポートにより、意外に早く到着されました。到着を称える拍手の中で、高野さん達の満足感溢れる笑顔は、今でも忘れることができません。

ところで皆さん、ダルマさんは達磨と達磨の二種類ある事をご存知ですか。実は、今回の旅で今泉さんの奥様からお聞きするまで、私は二タイプあることを知りませんでした。ちなみに、少林寺の石碑には「摩」の方が刻んでありましたが、摩と磨の違いは一体何でしょうか。

お知りになりたい方はご本人に直接お聞き下さい。まさか肘を切らなければ教えてくれないとも思えませんが、如何でしょうか。

中国仏蹟参拝で撮る

我孫子市 三町 勲

一、北京の万里の長城

万里の長城の八達嶺に登ったのは四月二十九日であった。その日は雨だったが、登った午後には、丁度雨が上がつくれた。全長六千キロメートルに及ぶ大城壁が遠く霧の中に消えるように延びている様子は、気の遠くなるような労働と汗の結晶の鎖のように見えた。この大城壁を眺めていると、エ



万里の長城

ジプトのクフ王のピラミッドが頭に浮かんできた。万里の長城が世界一長い遺跡であるのに対して、ピラミッドは世界一高い遺跡といえる。それぞれ目的は違うが、昔の為政者の勇気と実行力に感服せざるを得なかった。

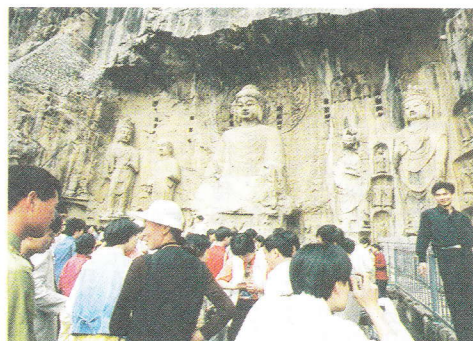
二、西安の兵馬俑坑博物館

大きい体育館のような建物の中が兵馬俑坑であり、一号坑から三号坑まで三つあるが、一号坑が規模が大きく感動的であった。秦の始皇帝死後を守るために、殉葬坑に並べられた実物大の陶兵や陶馬は、二千点以上といわれ、今見てもあたかも生きた兵馬に見えるのが不思議であった。

私の家内が、「エジプトが石の文化、オリエントが泥の文化、中国は焼き物の文化」といった。そういえばそんな見方もあると感心しながら、エジプトのアブ・シンベル神殿を想い出した。ナセルがアスワンダムを建設した時、水没するラムセヌ二世の巨大な像を含むこの神殿を高台に移設して、古代遺跡を大事に保存した。文化遺産をつくる労力と費用もぼう大であるが、それを保存管理する労力と費用もそれ以上にぼう大である。残念なことに、兵馬俑坑の中は「撮影禁止」であった。しかし、



龍門山の龍門石窟



奉先寺大盧舍那仏（中央）

写真に撮ってしまふより、もっと強烈に心の奥に焼き付けられた。

三、洛陽の龍門石窟

伊水の対岸の香山（東山）側から龍門山（西山）の石窟の全貌を見た。よくも、全長一キロメートルにわたって蜂の巣のように掘ったものだ。両山の石窟は二千三百、仏像は十萬体といわれている。石窟を間近に見ると、石窟の仏像の一つ一つの素晴らしさに目を見張った。また石窟の一つ一つは修行道場のように見えた。その中でも、奉先寺大盧舍那仏は唐代女帝の則天武后をモデルにしていると伝えられている。その端正な顔立ちと気品は、奈良の東大寺の大仏様を思い出させてくれ、東洋文化の脈々

「特別寄稿」

第一回訪中に続いて今回も大変お世話になりましたヤマト運輸(株)トラベルの神宮寺さんと、今回の訪中で全行程のガイド役を務めて下さった張さんから原

稿を頂戴いたしました。お二方とも訪中団員のために大変献身的に尽くして下さいました。改めて心から感謝申し上げます。

我、鄭州にて甘い香りの烏龍茶に遭遇す

ヤマト運輸(株)・トラベル銀座支店

中国室 神宮寺将雄

中国へは学校を卒業してから、毎年といつてよいほど訪れているが、今回ほど貴重な体験をした事はありませんでした。嵩山での椎名先生の講義は活字で読んでいるものの、お話を伺いし、翌日に



抹茶を喫する神宮寺さん



百万\$の笑顔！神宮寺さんのスピーチ

わせて「没有問題！」(なんの、なんの)と言ったような気がしました。

もう一つの体験は烏龍茶にも甘い「かほり」があったということです。知識も作法もとならない私

少林寺の立雪亭の前に立ったことです。想像が膨らみ、慧可があたかも目の前に立っているかのよう

にとつて、鄭州の興亜国際ホテルのある部屋で、私は初体験の甘い「かほり」の烏龍茶に遭遇しました。たかが烏龍茶などと侮ることなかれ。アサヒ、サントリ、伊藤園と飲み慣れたあの味とは少々異なるもの。それは時間を楽しみ

葉の色を楽しみ、香りを楽しむという、大変風流な楽しみ方でした。無錫・紫砂の急須にぐい飲みほどの大きな湯飲み茶碗で、先ずは急須や茶碗を煮えたぎった熱いお湯で温め、数分後お湯を棄て、茶さじ二杯から三杯の香ばしいかおりの茶葉を入れ、煮えたぎったお湯が九〇度ぐらいになったところで、急須に約三〇センチぐらい上から離して、お湯を落とし入れる感じで入れ、数分間お茶の葉を蒸らす状態で待つ。この僅かな時間がまた楽しい。お茶の味の出来を想像するわけである。このあと更に小さな縦に細長い茶碗にほんの少々入れ「かほり」を聞くわけである。たいへん優雅な所作である。

なんと高邁な知識と経験が一杯詰まっている人達の集団であろうか。訪中後、数ヶ月たったこのごろ、小畑さんの顔を思い出しながら紫砂の茶碗で烏龍茶を楽しんでいます。

最後になりましたが、今回は椎名ご老師をはじめ皆様のご協力をいただきました事に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。また機会がございましたらお会いしたいと存じます。

仏教を親しむ 旅に感謝

中国ガイド 張 江南

今年の四月二八日より、よい機会に恵まれて、龍泉院参禅会の皆さまと一緒に北京・西安・洛陽・鄭州・上海を巡るコースを見学いたしました。

以前、私のイメージの中では、仏教はとてもむずかしいもので、



抹茶を喫する張さん



いつも笑顔で親切な張さん（右から三人目）

私の人生や私の生活とはぜんぜん関係がないものだと思っております。

しかし今回のフルガイドによって、仏教思想はそんなにむずかしくなく、むしろ私たちの人生、私たちの生活を指導していること、仏教思想は社会生活、また人間の心を浄化してくれることがわかりました。

中国は四千年の歴史があります。また昔インドから伝来した仏教も二千年の歴史があります。

しかし、中国の古代文化はどういう形で子々孫々へとつながってきたのでしょうか？

結局宗教しかないのでしょうか。残念ですけども、このことについては私と同輩の中国人はほとんどわかりません。

今後は中国の社会経済を發展させるとともに、古代文化と仏教文化も継承と發展ができますよう心から祈っております。

龍泉院参禅会の皆さま、お体に気をつけてください！

（一九九八年九月一〇日、北京長城飯店にて）



達磨面壁洞前

とした流れを感じさせられた。

四、登封県の達磨面壁洞

少林寺参拝、初祖庵と二祖庵拝観の前日、椎名老師の「慧可断臂」の講話があった。この講話の感動が心に焼き付いた明るる日、少林寺から初祖庵をへて、五乳峰の急な坂道を登った。頂上近くまで登り下を見ると、初祖庵や少林寺の町がかすんで見えた。

山上の面壁洞の前は木陰になっていて、空気が涼しく、今までの疲れがすっかり消えた。洞の中に一步踏み入れた時、一瞬びっくりしてしまった。黄金に輝く達磨座像が目の前にあるではないか。私の想像に反する情景であった。

文化遺跡を大事にする気持ちは

よく分かるが、それも度をこすと、そのけばけばしさが期待と魅力です。文化遺跡を後世まで温存することは、昔のままの状態に保存することではないだろうか。下山の足は、打ちひしがれた気持ちで重かった。

五、開封の鉄塔

青い空に突きささるようにそびえる鉄塔は、開封のシンボルであるという。いろいろな模様が彫り込まれた鉄色のレンガが壁に貼り付けてあり、あたかも鉄の塔のように見える。高さ五四メートルの八角十三層の鉄塔のてっぺんまで入って、記念写真を撮った。広角レンズで無理矢理に全体を入れた



開封の鉄塔



黄河の中州

ので、両側の人の顔がうりざね顔に撮れていて、甚だ滑けいに見えた。こんな写真は撮ってはいけな

六、鄭州の黄河遊覧

ホバークラフトに乗って黄河の悠久の流れの中に滑り出た。紀元前の歴史の流れの中にタイムスリップしたように思われた。川岸が遠くなった時、河の中に高圧線の鉄塔がそびえているのが見え、その橋脚が黄土に埋まっていた。川岸には、レジャーに来た人や馬が小さく見え、矢継ぎ早にシャッターを切った。しかし、この雄大な景色をカメラに納めることは到底できるものではなかった。

ホバークラフトが中州の上に滑り上がった。そこでホバークラフトを降りて、黄土を踏みしめながら、大河の広さを今一度確認した。黄土の上からでは、ここが大河の中とは思えない。広い砂漠のように思われるのであった。「矢張り広く大いな」と思わず叫んでしまった。

遊覧の帰りのバスの中で、「しまったなあ。あの木目のこまかい黄土を持って来ればよかった」と家内に話しながら、粘土いじりをした子供の頃を懐かしく想い出していた。

中国旅行にみる煩悩

柏市 安本小太郎

今回の中国旅行では、参禅会の方々と、ホテル、バス等の交通機関、寺院、観光地で六泊七日を共にさせて頂きました。

広大な中国の中原を移動したので、バスの時間が永く、椎名老師とも同席の機会を得ました。バスは、開封の大地を黄河に向っています。車窓には延々と麦畑が続き、栽培された棗や、街路樹が有るくらいで、日本の山国で育った自分には、木の少なさが目に付きしました。老師との会話は、「広い所ですね……」から始まり、風景のことに終始し「こんな所で暮らす人々は、何を燃料にしているのでしょうかね」のあたりまで来ると、老師は黙ってしまわれた。あつまた同じことを何時までも話す癖が出てしまった。これは貪欲でしょう。

窓の外に緑のなだらかな山の開がる登封市のホテルで、中国美人のガイド張さんに抹茶をたてたとき、手が震えて茶杓で茶をすくうのがやつとであった。二六年お茶をたてて四度目のことである。これは、心を寂静にしない悼挙が、色欲に伴って現れたものであろう。

この様に今回の中国の旅は、風

物、対人関係をして、自分をみた旅でもあった。坐禅を深めて、軽やかに、やっていける様にしたいものだ。

訪中雑感

沼南町 添田 昌弘

「日本から中国を引いたら南洋の蕃族と同じになる」こんな文章を読んだことがある。特に仏教は中国抜きには考えられないだろう。その中国に行つて来た。私にとつては三度目の訪中である。

お寺は行く度毎に立派になり、きれいになっている。また中国人の参拝者も増えてきて、熱心な信者が多く見られるようになった。中国は変わりつつある。

一〇年前に感激し、興奮をおぼえた西安に再び行きたい。それが、今回参加した一番大きな理由である。西安(長安)は昔、歴史を学

んで、外国のきらびやかな印象をもった名前である。日本には一番影響を与えた土地ではないかと思う。日本の文化の原点は長安にあり、といつても良いのではないかとさえ思っている。

前回、古都としての静かなたたづまいと、落ち着いた古き良き中国の印象をもって帰ってきた。今

回それらが急速に失われつつあるのを感じた。高層ビル、建築ラッシュと道路が広くなり舗装され、交通渋滞にさえ巻き込まれた。どこにでもある西洋風の都会に変わ

りつつあるのは悲しい。

初めて訪れた洛陽、嵩山少林寺、黄河は天氣に恵まれ、楽しい旅であつた。次の機会が楽しみである。

日記代りに俳句を作ってみました。以下そのうち何句かを書き記してみます。

北京

さみだるる天安門前水あふれ
濡れてをる万里の長城緑雨かな

西安

雲の峰長安城壁西の門
柳絮飛ぶ城壁よりの長き道
夏めくやあたり明るき大雁塔
風薫る古き都の鐘の音

鐘樓の西安城内夕立かな

洛陽

晩春の河見下ろせし磨崖仏

嵩山

風薫る初祖庵までの上り径
五月晴れ達磨面壁祠前
塔林の天蒼々と夏木立
桐の花読経の声は初祖の寺
蜂飼がをりアカシアの花ざかり

黄河

濁りたる河溢れしめ五月かな

上海

小さき子五体投地す子供の日
雑踏の上海空港薄暑かな

「中国仏蹟を

訪ねる旅」見聞記

浦和市 美川 武弘

この度の「中国仏蹟を訪ねる旅」は、予てから、この地を訪ね歩いてみたいと願っていた中国の古都、特に歴史的ロマンに溢れた大唐の都長安(西安)、中国史上、長年に亘つてその中心的舞台として栄華をきわめた河南の洛陽といった古都などを中心に、その周辺の史蹟、仏蹟を巡る旅であることを知って喜んで参加致しました。

今回の旅は、旅行会社が募る一般的な物見遊山のものとは一味違つて、内容的にも密度の濃い充実したもので期待以上に楽しい旅となりました。

感激のさめやらぬうちに、感想をまとめてみようと思います。

旅は北京から始まりました。これぞ中国のシンボル、「万里の長城」見物が圧巻でした。北京を囲む周辺の山々の尾根を這うように延々と築かれた八達嶺長城、この長城に自ら立って眺めた雄大な眺望には胸が締めつけられるような感動

を覚えしました。

東西の文化を結ぶシルクロードの玄関口、城郭の都・長安では、遙か西域、インドへ旅立った唐僧玄奘三蔵の想像を絶するような苦難の旅に思いを馳せ、また近郊の秦始皇帝御陵周辺から発掘された夥しい勇壮な兵馬俑の守護軍団のど迫力に驚嘆し、あらためて、往年の始皇帝の強大な権力を、まざまざと見せ付けられました。

洛陽の竜門石窟寺院では、川岸の崖面にずらりと並んだ無数の石窟群の壮観な眺めと、大小さまざまな表情豊かな石仏群に瞠目するなど、とにかく広大な中国では、自然といい、見るもの、聞くもの、全てが我々の想像を遥かに超えるスケールの大きさに驚かされ続けた毎日でした。中国悠久の歴史とその意義をあらためて考えさせられたのも貴重な経験となりました。今回の旅のハイライトは、この旅の主目的でもある河南省登封県の嵩山少林寺参拝と、開祖達磨大師所縁の場、「達磨洞」の登山詣でありました。

少林寺は中国名山、嵩山連山の一つ、少室山の北麓に建立された古刹で、中国禅宗発祥の寺院でもあります。

少林寺ではご老師様はじめ参禅

会の皆さんと一緒に「般若心経」を誦経できたことも忘れられませんでした。一昨年の寧波の天童寺で味わった、あの感激を再び甦えらせてくれました。また、前夜のホテルでのご老師様のご提唱で、図らずも、菩提達磨と神光慧可の劇的な出会いを知り、しかも、神光が断臂をもって、決然たる「求法」の求道心を示した場、「立雪亭」山門を拝観しながら、壮絶な場面を想像してみたり致しました。

「達磨洞」は少室山連峰の一つ、五乳峰の峰頂近くにあり、少林寺周辺から見上げると、山の中腹やや上方から遙か峰頂近くまで真っ直ぐに伸びた、かなり急勾配の石段が続いているのが望めます。脚力に少々不安を感じながらも、意を決して登り始めたが、不安はいつの間にか杞憂となり、どうにか峰頂まで辿り着けました。峰頂で皆さんと一緒に「面壁九年達磨洞」に参詣できたこの喜びは一人のものがありました。

旅には新鮮な驚きや、発見がつきものですが、今回の旅には更に感動が付け加えられたようです。最後まで楽しく旅が続けられたのも、ご老師様はじめ、ご尽力くださった幹事の皆さまの万端行き届いた計画の賜と深く感謝して

おります。また、同行の皆さんのご厚情に心よりお礼を申し上げます。多謝



美女勢揃い／華清池

仏縁の旅をいただいて

柏市 高野千代子

私にとって今回の旅は、釈尊のお教えのとおり、すべてご縁なくしては成り立たないものであることを、身にしみてお示しいただいた旅となりました。

参禅会で、中国への旅の計画をお話いただいた時の、自分の目の輝きを今でもおぼえております。ところがその直後、弟嫁が肺炎ということで入院することになってしまいました。入院しました所、胸に水がたまる肺気腫との診断で、容体もはかばかしくなく、旅の申

し込み期限も迫り、参加したいという思いと、病人を抱える弟への思いが交錯して、決断することへのためらいで、右往左往いたしながら、最後に不参加とすることに決めました。その頃の妹の容体は臨死体験をするような、死の淵をさまよっている状態が続き、これをみて、不参加で善し、と決心がつきました。

すべてをあきらめ切ったとき、あんなに容体の悪かった妹が、四月に入って間もなく、退院することが出来たのです。今からでも間に合うかしら、私の心はざわめきました。参加なさる皆様の旅の打合わせ会も終っていたからです。祈りをこめて、ご老師、幹事の五十嵐さんに連絡をとりました。

四月一三日に旅行社の神宮寺様より、間にあいますとのご連絡をいただいたのです。幸い、息子も同行してくれることになり、すべて旅へのお膳立てが整いました。

「忍耐は、他力なり」

私の大好きな言葉です。今回のことを振り返りますとき、人生は、決して、決して、自分でレールをひけるものでなく、何か目にみえない所のご縁をいただかせていただき生かされている、不思議さを感じないではられません。

つつがない中国の旅は、ご老師をはじめ、同行の道友の皆様、優しい添乗員の方々、そして連休の間、私に息子を、父親を貸してくれた優しい嫁、孫達に、心から感謝いたします。
仏様に謝々

客亭の提唱

松戸市 小畑 節朗

五月一日午後、バスは嵩山の山城に入る。太室の山頂は雲霧に鎖されて仲々姿を見せない。

山中は桐の花が真盛りでアカシアの白い花も交り養蜂の巣箱も散見さる清時（平和）の風景である。

中国最古の佛塔である嵩岳寺塔僅か一嶺を隔てて嵩門の危壁下に立つ法王寺塔を仰ぎ、嵩陽書院の古柏古碑を見て岩だらけの院河を下ると早や登封の街であった。

登封少林国際ホテルの部屋のカーテンを開くと、眼前に太室の山並。先程までの雲は全く消えて最高峰の峻極峰から東の中岳廟に連なる黄蓋峰までの嶺々が山腰から頂上まで夕陽に映じて壮麗な姿を現わして、明日の少林拝登の好天を約束してくれる。

太室即事

幽壑奇峰造物真、清時好景也随人。

桐花花謝紫方潔、槐樹樹欣緑已勻。俊極高顛収淡靄、嵩門古塔隔風塵。雲披一望登臨地、独領仙区共惜春。

幽壑奇峰は造物の真、

清時の好景也人に随わん。

桐花 花は謝て紫まさに、

槐樹 樹は欣びて緑すでに勻し。

俊極の高顛は淡靄を収め、

嵩門の古塔は風塵を隔つ。

雲を披らいて一望す登臨の地、

独り仙区を領して共に春を惜めり。

龍泉院参禅会の祖跡拝登には前回もそうであったが旅行中にご提唱を頂いている。今回は少林拝登を翌日に控え太室山に夕暮が迫る登封のホテルの一室で行われた。

講本は『景德伝燈録』卷三「慧可断臂・安心問答」であった。

椎名老師は宋版の『景德伝燈録』の原文をコピーされて、更にご自身による読み下し文を附されたものを用意されてのご提唱である。

——その年の十二月九日夜、天より大いに雪雨——。から始まる二祖断臂のご提唱は場所が嵩山太室の下、時は明朝少室拝登を期す前夜、重々無盡の縁を頂いて感銘深く生涯忘れ得ぬ聴聞となる。席を同じくする者二名感一入の一夜であった。

一九九八年五月一日宿登封客

亭聴聞大心老師提唱景德伝燈録慧可断臂章

登封羈思意非輕、一夜何由洗俗情。

面壁真乘嚴有祖、雪中断臂寂無声。

忘形求道超三世、即得安心竟万生。

客路風和提唱響、欲登少室默玄嶠。

登封の羈思、意輕きに非ず、

一夜何に由てか俗情を洗わん。

面壁の真乘嚴として祖に有れば

雪中の臂臂、寂として声無し。

忘形の求道は三世を超え、

即得の安心、万生に竟らん。

客路の風は和す提唱の響、

登らんと欲す、少室默玄は嶠しきも。

※達磨面壁洞前に万曆年間建立の双柱单孔の石坊あり、「默玄処」と刻せり。

二度目の

訪中の想い出

船橋市 井之輪 進

前回の訪中二年前と比べて、中国の発展は目ざましく、ホテルなど近代化が特に目立った。

郊外の湖畔や公園では、早朝から気功やダンスなど中国式健康法に興じていた姿も印象的でした。

また都市では、日本と同様に車でいっぱいです。歩行者や自転車

は信号をそれほど気に掛けないので車の運転手は大変です。ガイドさんが言われていた、運転免許の他に「運転の勇氣」が必要との言葉の意味が、観光バスの前席に着かれた人達には、ヒヤ汗をかきながら納得されたことでしょう。

嵩山では晴天に恵まれ、拳法で有名な少林寺から、初祖庵を経て五乳峰の頂き達磨洞へは、山道と急な石段を幾つも登り、やっと到着した。眼下が一望でき周囲の山々の景色は素晴らしく、言葉では表現出来ないのが残念です。

達磨大師が九年間修行された洞窟を参拝させて頂き、坐禅と眼下の下界を一望しながら、悟りを開いた姿を想像した。私もほんの一時ではありましたが、同じ場所に立ち素晴らしい山景を見渡し、この空気を味わって最高の気分になることが出来ました。

今回の旅行でも皆様方や、現地中国ガイドの方々のお陰で無事に楽しい想い出を作る事が出来ましたこと御礼申し上げます。 合掌

〈第二次訪中特集〉おわり

四国八十八ヶ所 徒歩巡拝

流山市 久光 守之

桜は今日が満開、明日から散り始めるであろう。一枚そして一枚、花びらが散る。惜しみつつ行春を覗いていると、白いワンピースを着た、三才位の幼女がその花を一枚ずつ舞うように袋に入れている。おそろくあの幼女は、花と自分が一体であり、花が幼女で、幼女が花なのであろう。

夢幻の中に立ちどまっていた私は、山川草木悉有仏性を改めて実感し、至福の時間に感謝した。

今年も去年と同じように、四国八十八ヶ所を徒歩にて巡らせていただいた。前回は全行程五二日を要し、今回は三月二〇日発、四六日目四月二五日満願。

「青葉分け行く、良寛さんもゆかし」山頭火も良寛様も歩まれた遍路道は、道というより溝で、御大師様に導かれる修行の霊場である。

今回も一人歩き同行二人である。巡拝は遍路の命題を、御大師様から与えていただけたのが、妙であり有難い。三月二七日三七番札所岩本寺にて、朝の説法で、「この巡

礼の終りに、煩惱を煩惱として持ち帰るか、それとも煩惱を菩提として持ち帰るか、自分なりの結論を出してください。ちなみに煩惱即菩提という言葉があります」との言で終られた。これが今回の旅の命題となった。

一日平均三〇キロ歩行、延べ約千五百余キロ、自分と対決する時間は充分ある。ちなみに徒歩遍路の一日を、日記より抜粋してみる。

四月一八日土曜日（曇り後雨）朝四時起床、ストレッチ体操、足のテーピング手入れ、読経、写

経後六時宿発。早発ちゆえ前夜朝食用おにぎりを用意していただき、七時半山中路脇にて食す。遍路道土砂崩れにより車道を登る。目指す雲辺寺はその名のごとく、海拔九一〇メートルの雲の中にある。途中鶯の声盛ん、励ましてくれる。私も応じて口笛で真似る。

山桜もすでに散っている。季節の変わり突然来るのではなく、夏の季が春の季を押し出すように。死も生きているうちに死をはらみながら死に至るのだろうか。

しかも死は順序よくやって来ない。前から後から思いがけなく来る。「沖の干潟遙かなれども磯より潮の満つるがごとし」徒然草の一章を思い出す。雲辺寺の御大師

様にお会いするための一步一步、これも死への一步一步ではないか。急の坂だから歩幅を狭めて、一歩ずつ確かめながら登る。雲が足元の峯から湧き上って来る。二〇メートル先見えない。

雲のぼるさだかならず遍路道

一〇時二〇分雲辺寺着、納経後、寺前の店にてうどんを食す。二五才過ぎの娘さんに、お菓子の接待をいただく。昨夜の雷、鶯には方言がある等、さわやかな談笑が楽しい。

午後より雨、昨日に比し冷たい雨なので、ポンチョも蒸さず心地良い。一三時五〇分大興寺。一六時神泉院。六九番札所観音寺着。一七時若松屋旅館着。

一日走行三一キロ、所要時間一時間。山道険しく予定より一時間超過する。いつもの通り、下着、靴下、判衣を洗濯後、入浴する。一八時夕食、日記記入後一九時三〇分就寝。

以上で遍路の一日を推察していただきたい。毎日千変万化。感激と感謝の連続である。苦しい時も多いが、遍路の旅にでる資金作りの方が苦しい。昨今の不景気のなか、人に迷惑をかけず、他人を利用せず、年間二ヶ月連続して休み得るバイトは限られている。バイ

トの方が長く重い。しかし修行と思えば、それも楽しい。

高野山奥之院にて、思わず御大師様の前に伏す。所詮煩惱具足の我身、菩提心も具す。「この法は人々の分上ゆたかにそなわれり。修せざるにあらわれず。証せざるにはうることなし」今まで見えなかったものを見させていただいた事を感謝し、又健康と老婆の理解と励ましに感謝し、再来を約束する。濁れる水の流れつつ澄む（山頭火）

筍堀り

四月二六日坐禅・禅講後、龍泉院の竹林にて筍堀りが実施されました。霧雨の降る中、手袋、長靴姿にスコップ、クワを手に本堂裏の竹林へ。小一時間後天候不順ながら立派に育った筍を収穫しました。料理人の植村氏に食材の持ち味を活かした調理法を伝授され、大きな袋に分配して大切に持ち帰りました。

施食会

八月一六日、龍泉院最大の行事、施食会が行なわれ、参禅会員九名が本堂の飾り付け、車の整理誘導、案内と奉仕活動に参加しました。この夏一番という猛暑の中、発足間もない梅花講の清涼な調べで始まり、木村誠治老師の法話を拝聴しました。

《一泊参禅会》

六月六日・七日



第一三回一泊参禅会は、平成五、六年に続いて、龍泉院を会場に実施されました。椎名老師のご提唱『典座教訓』は今回で四四段全段を讀了しました。『典

座教訓』は台所で調理する典座の姿を通して仏法を指し示しています。四一段からの最終部分は、どんな役職にあっても喜心、老心、大心の三心を忘れてはならないと締め括られています。

折しも、今回は小畑代表幹事が自ら典座役をかってでて、朝早くから散会まで台所で大活躍をされました。黙々と配膳する姿は会員に多大な感懷を与えたようです。寺田、加藤両幹事さんは、美味しい添菜を搜されたり貸布団の手配、進行役と大役を果されました。充実した一泊参禅会を無事円成できました事、皆様に感謝申し上げます。

遠い昔の一泊坐禅の思い出

浦和市 美川 恒子

今年の一泊参禅は、いつもお邪魔しております「龍泉院」で肅然と行われました。私共にとつては三度目の一泊参禅でございます。坐り慣れた龍泉院だけに、恰も、我が家という、落着いた思いの中で坐ることができました。これも偏へに、ご老師様始め、幹事の皆様のご配慮の賜と、心より感謝いたしております。

この一泊参禅会では、大役の典座役を小畑さんが自ら担当され、私は、小畑さんの身近かでお手伝いさせていただきました。典座役の小畑さんの手際の良さは実にお見事でありました。

献立て、盛り付け、お菓子を出す順序等々、大変よい勉強をさせて頂きました。特に、料理の配膳については細部にわたつてきめ細かくお心遣いなさっておられたのには感じ入りました。お仕事の最中にも、色々とお教へ頂くことが多くございました。とりわけ、小畑さんは、日常の家庭内で雑事に追われている主婦の立場、典座役としての主婦の大変さに理解を示

され、思い遣りに溢れたお言葉を頂戴し大いに恐縮し、感激させられました。

思えば、一流の職人といわれる方々は、殆どが男性の方々であります。私なりに考えてみますと、端的には、家庭内の雑事に追われることもなく、一つのことに集中して専念でき、技の修得に没頭できるからではないでしょうか。私も専業主婦は、その方々の陰で働き、縁の下で支えていることに生甲斐を見出し、勤めているのです。折しも、家庭内での典座役としての主婦に対する小畑さんの暖かいお言葉は、身に余る喜びでもありました。

さて、四〇年も前になりますのでしうか、高校の生徒時代、京都の西本願寺系の学校に通っており、折、授業の一環としての「坐禅」に参加したときの思い出が甦つてまいりました。

あれは確か、宇治黄檗山万福寺での一泊坐禅のときだったと思います。夏の暑い盛りの入山でした。生徒はみな、白いトレパン姿で参加し、坐禅、写経、作務、朝課と、無論、おしゃべりは厳禁、女生徒達には苦痛の行程でした。まして、蒟蒻入りのカレーライス、重湯のようなお粥の小食、二切れの沢庵



不慣れながら、なんという手際のよさ！

で応量器を濯ぎ、飲み干す。朝四時の起床、朝課に続いて、広い境内の掃除の作務等々、何故このような事を、将来何の役に立つのかと、解けぬ疑問を抱きながら、奔放な女生徒達是不平、不満だらけで、坐禅会は不評だったような記憶がごさいます。

今、思えば万福寺は隠元禪師によって建立された名刹で、お茶処の宇治にあり、随所に中国風の意匠が施された建造物、静かな坐禅堂等々、史跡として見所も沢山ありましたが、当時は周りを見回す術も知らず、大半の者は、ひたすら、義務感だけで坐禅を行っていたにすぎませんでした。

今、自ら坐禅に参加し、ご提唱を伺う身になってみて、初めて幼いながらも貴重な体験をさせて頂いた、黄檗山万福寺での参禅会を懐かしく思い出し、改めて、感謝の念を禁じ得ません。これからは、精進しながらも、一度は立ち止まり、周りを見つめつつ、さらに進んで行こうという心掛けでまいりたいと願っております。

今後とも宜敷くご指導の程、お願い申し上げます。 合掌

人間は移動出来る樹木

我孫子市 清水 秀男

最近の日本のゴルフトーナメントを見ていると外国選手の活躍が目につく。海外のトーナメントでは日本選手の弱さが目につく。これは何に起因するのであるのか？日本の選手の実力の無さもさることながら、日本の選手の内観に起因するのではないだろうか。「人間は移動出来る樹木」であるという説がある。人間はあくまで自然の一部であり、樹木と違うのは移動できる事である。大自然の営みの中で大自然の多くの御蔭を受けて生きさせて頂いている事を人間は忘れていたのではないだろうか。人間が存在の中で一番偉

いという思い上がり、人間中心主義のエゴイズムが自然を破壊する事に繋がっていないだろうか。反省する事しきりである。

ゴルフの話に戻すと、ゴルフは自然との対戦といわれる。自分が大自然の子である事を本当に体得出来れば、何時でも何処でも自然に同化する事が出来るのではないだろうか。日本人プレーヤーの言い訳は見苦しい。気温が低い、芝目に負けた、コースマネージメントが悪い等々。自分のいたら無さは棚に上げ、責任は他に転嫁する高慢ちきな態度が続く限り成長はない。

その点外人プレーヤーは、自然に対し謙虚であり、自然に同化している。ある大学教授は次の様に分析されておられる。

「欧米のプロゴルファーは自然に対する畏敬の念がある。そうした哲学的、宗教的ともいえる思想が忍耐に繋がり彼らの強さの背景になっているのではないか」

以上日本人プロゴルファーの事を申し上げたが実はこれは私自身の毎日の生活でもある。「自分は全宇宙の存在によって今、生かされている」にもかかわらず「自分が独力で生きている」というエゴ心で思い上がっている。よくよく考

えてみると仏教の「縁起の法」を体得していないにすぎない。何年仏教を学んできたのか。反省することしきりである。「諸行無常」「諸法無我」を本当に体得すれば、今迄のエゴでこり固まった自分はない。一燈園の西田天香老師は次の様に言っておられます。

「拝むというのは自分をなくするのです。自分をなくすると全体が自分である」

今迄の自分を無にし、大いなる大自然と合体していくと、新たな自分が自然と湧出されて来るのではないのでしょうか。

最後に学生時代に仏教の眼を開いて頂いた大恩人で、それ以来現在まで暖かいご薫陶を賜っております稲葉襄先生のお言葉を味わいたいと存じます。

「我々は大自然に感謝しつつ、大自然と共存し、よりよき宇宙時代を建立して行かねばならない。そのためにも、我々は常日頃も、自然に、自然体で、振舞わねばならない。自然にとか自然体で生きるということは、無心であり、力むことなく、無理せずに、素直に、しなやかに、柔軟に、しかも心身を挙げて精一杯生きることである。丁度自然界における草や木がそうであるように」。

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
 - 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
経行鐘 二声 経行
放禅鐘 一声 放禅
 - 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く。
 - 講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成一〇年七月より「見佛」の巻を提唱
 - 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
 - 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。
 - 一、会費 無料
 - 一、成道会坐禅
- 月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月六日）
- 釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

参禅会記録（）中は座談の司会者
平成一〇年

●四月二六日 二九名

（小畑 節朗氏）
坐禅・禅講後、筍堀り

●四月二八日～五月四日

中国仏祖跡を訪ねる旅

●五月二四日 二二名

（今泉 房子氏）

●六月六日・七日

一泊参禅会 二六名

於 天徳山龍泉院

幹事 寺田健二氏

加藤誠一氏

●六月二八日 二八名

（寺田 哲郎氏）

●七月二六日 二九名

（美川 恒子氏）

●八月一六日

「龍泉院施食会」作務奉仕九名

●八月二三日 三一名

法話 木村誠治老師

●九月二七日 二三名

（大坂 晶子氏）

●中国旅行の記事の編集は、参加された杉浦氏にお願いしました。

お忙しい中、快く引き受けて頂き

深く感謝申し上げます。

▼険しい山道を登り、達磨洞へ着いたときの皆さまの感激が伝わってくるようでした。

▼九月の御提唱の中に「若親近法師得菩薩道…」とあり。すごく幸いなことに私たちは素晴らしい仏法の師についている。あとは…

▼安本氏も二ヶ月の予定で四国八十八ヶ所巡りに出発なさったとか金剛杖と共に今頃どこを歩くやら。

▼流れつつ澄んでゆく水のように人は歩きつつ澄んでいくのであるうか。（吾亦紅）

▼経済は低迷し、一段と市民生活は厳しくなっている。作っても売れず、先行き不安から買うにも躊躇する。七年前までの右肩上がりの成長動向を懐かしみ、今は夢まぼろしと嘆く者も多い。しかし考えてみれば、世界の七割は慢性的食糧難に陥り、生活物資も貧弱だ。被援助国の倉庫には先進諸国の古着ばかりが目立つという。

▼こんな情況だからこそ、人生を振り返り、自らの姿を反芻し真実を直視できるのかもしれない。嘆くより、こうした時代の試練に遭遇した事を感謝したいと思う。

▼前に一歩進むために、ある人の言葉を思い返す。今の姿は、あなたが選び作ってきた結果です。変えるのはあなた次第です。（佇泉）

●発行／天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81
●印刷／岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45
●電話 0471(91)1609
●FAX 0471(43)3131